

## 浜名湖北岸マンガン黒姫鉱山について

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2011-08-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鈴木, 康介<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00005907">https://doi.org/10.14945/00005907</a>                  |

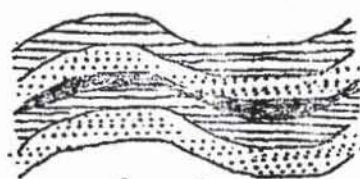
# 浜名湖北岸マンガソ黒姫鉾山について

四年 鈴木康介

6月21、22日の2日間、竹内先生の御足労を煩し標記の鉾山を見て来たので、こゝに簡単に報告する。

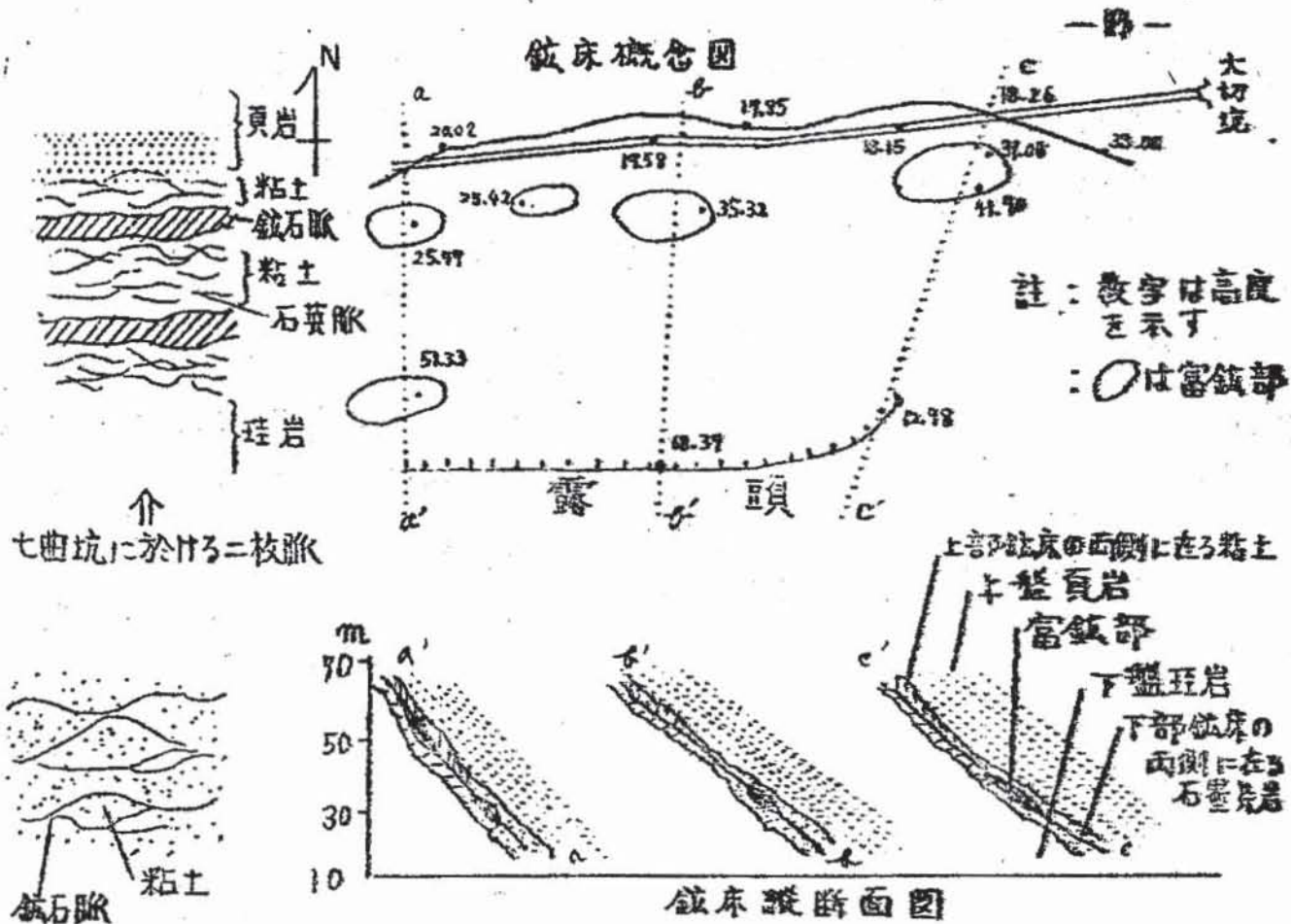
鉾山附近の地質は珪岩と頁岩の互層よりなる秩父古生層で鉾山東側で走向は北 $90^{\circ}$ ~ $80^{\circ}$ 東、北に $40^{\circ}$ ~ $60^{\circ}$ の傾斜をなしている。鉾床は直径300米高さ、70米の古生層よりなる小内丘の中央よりやや北よりに、母岩の走向傾斜とほとんど一致した、つまり上の頁岩と下の珪岩にはさまれ、ゆるく褶曲した板状を成している。勿論部分的には大きな塊をなしていたり板が薄くなって切れ落ちてしまっているところもある。この鉾脈の板が地表に1本の露頭となって現れているが、この主露頭と約10米の間隔を保って他の1本が北側に走っている。後者はおそらく沸上り鉾床であろうと考えられているが、確実ではない。或は断層に出来た別のものであるかもしれない。現在のところ沸上りと断層に出来た本鉾床の両要素を有すると考えるのが無難であると考え。ほとんど1枚と考えられる鉾床が部分的に直径数米の塊状をなしている点について吉村豊文のマンガソ鉾床1枚説に基くプロペラ型鉾床をもってすれば、どうやら説明出来るのである。即ち鉾床、或は母岩の褶曲した山谷にあたる部分は岩石が特に破壊され弱部となり、こゝに鉾液の上昇があれば交代作用が行われ、結果図の如くプロペラ型となるのである。

鉾脈の西端と思われる高度30mの七曲坑では、50~70mの間隔でもって二枚の脈が見られた。



プロペラ型

(図参照) この鉾山では地層面に沿った断層面に出来た鉾床であるが、二枚の脈がこの床に平行に見られるのは比較的高部鉾床に限られ、低部即ち大切坑のレベルあたりでは、この現象が認められない。又これと共に高部では脈の上・下盤に相当の厚さの灰白色~淡褐色を示す粘土を持っているのに対し、下部ではこの粘土が見られな



くなり並に上部では少なかつた石炭片岩がこれに換へられている。上部にゆく程多くなる粘土は頁岩の風化した断層ネバであろうが、銻液による熱的影響も受けていることは云へよう。この粘土が銻液上昇の前に相当発達していたことが考えられる。七曲り坑で鑛毒出来た図の如く粘土の中に銻液がしみ込み、銻脈が粘土を取り込んだ椀形になつている。更にこの粘土中には銻脈に並んで石英細脈が網状に走っている。これは銻脈の上・下盤共よく発達しており、形態からして銻床生成の折、銻液より分離して出来たものであると推察される。又石英細脈とは別にしばしば小塊状をなした石鹼石 (Soapstone) が見られた。この石鹼石は母岩が高温低圧熱水液に侵された爲に生じたのであつて標本として取り得たものは海泡石 (Serpentine) である。

銻床生成に就いて観察事実より考えるに、断層の上・下盤側共よく滑っていることから、断層に銻液が上昇固結して後少くとも一帯以上の断層運動があつたことと思う。坑夫の云う目遣いはこの銻床生成後の断層



運動によるもので、脈が斜交断片で入れ違っている。上部鉍床程、鉍石の品位が高いが、これが品位と共に増す粘土の幅と如何なる関係にあるか、或は下部鉍床即ち大切坑のレベルで粘土なく、石墨片岩厚く、しかも鉍石自身が黒く変っている点、更に大切坑レベル以下では殆ど鉍脈らしい鉍脈をつかみ得ないのは、実際に富鉍部がないのか、いや出来得ないのか、二本ある露頭のうち上盤側に当る一本の成因等々解明すべき問題は多数ある。 (27年7月)

参考文献 吉村豊文；日本のマンガン鉍床